
教え子が母になった日

佐々木天音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教え子が母になった日

【Nコード】

N4881J

【作者名】

佐々木天音

【あらすじ】

半年ぶりに聞いた父の声は、僕には予測さえできない人生の選択だった。

半年ぶりの電話

父からの電話は、おそらく半年ぶりのことだった。元々ふつうの父親じゃない。

世間から見ても変人扱いされるのが当たり前のような父と、普段から連絡を取り合う理由も気力もなかった。

僕も大学を出てスムーズに教師になれたことについては、支えてくれた父への感謝は忘れたことはないつもりでいる。

ただ、社会人になって三年も経つ今、わざわざ話の合わない父親と距離を置きたがる気持ちも理解してもらえと思う。

大学在学中に亡くなった母の命日と、正月だけは顔を見せに帰る程度の親子関係。

それ自体はごくふつうの、ありふれた繋がりだと思っている。

そんな希薄な僕らの間で、電話が活躍する場面も今までほとんどなかった。

それだけに父からの電話はいつも唐突で、不愉快な存在とも言えるものだった。

「裕理か、久しぶりだな」

父の声は、重苦しい圧迫感と、妙な間がある。

大学の教授という特殊な立場を考えると、非常にすつきりするのだが、僕はこの声にどこかコンプレックスを感じざるを得ない。

多少の苛立ちを抑えながら、僕も久しぶりと応じた。

半年ぶりにかけてきた電話が、単なる様子伺いではないことは明白だったので、さっさと本題を、と思った矢先に父は言った。

「再婚が決定した。今度、一応会ってもらおうから頼む」

別に話の内容を予測して聞いていたわけではないのは当然なのに、

あまりの予想外の言葉に僕はただ生返事を返すしかなかった。

「そっか、また日にちが決まったら教えて」

父もそれ以上は細かい話をするつもりもないようだった。

半年ぶりの電話（後書き）

生まれて初めて小説を書こうとしています。
どうなることやら？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881j/>

教え子が母になった日

2010年10月28日00時57分発行